

**実生活につながる国語力の育成
～学びの自覚と言語活動設定の工夫～**

1 はじめに

(1) 生徒の実態

ア 生徒アンケートより

これまで担当してきた生徒は、国語の授業で学習する内容が「実社会での生活に役立つ」と考えている割合が多い。将来、仕事をしたり、日常生活を送ったりする上で活用できる基礎的な資質・能力を培うことができると捉えているようである。ところが、実際に「日常生活の中で国語の学習が活かされたか」と尋ねると具体的な回答ができる生徒が少ない。

イ 全国学力・学習状況調査より

令和6年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果、「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか」という質問に対して、当てはまると回答した生徒は27.6%に留まっている。

(2) 主題設定の理由

生徒たちには「VUCA時代」と言われる予測困難な社会に対応できる資質・能力が求められている。そのためには、あらゆる目的や状況で生かせる汎用的な資質・能力を身につけることが必要である。中学校学習指導要領（平成29年告示）では、生徒が主体的に挑戦したり、他者との協働を大切にしたりながら理解をしていくために、体験活動を重視することの必要性を挙げている。これらを参考にしながら、身につけた資質・能力がどのような場面で役立ち活用できるのかを理解し、実際に活用する経験をすることで、さらに複雑で高度な課題に直面した時にも解決する力として身についていくと考えた。国語の授業において、言語活動こそがその大きな役割を担っていると考え、本研究の主題として設定した。

2 研究概要

(1) 目指す生徒像

- ・目的意識を持って、意欲的に学習に取り組む生徒
- ・課題解決に向かって、協働的に学ぼうとする生徒
- ・学習したことを他の学習や実生活に生かそうとする生徒

(2) 研究仮説と手立て

【仮説1】身に付けたい力を明確にし、ねらいに沿った適切な言語活動を取り入れることで、児童は目的意識と見通しを持って学習ができるようになり、意欲的に学習に取り組むことができるであろう。

【手立て】①本単元で、どのような言語能力を身につけさせるか明確にする。
②生徒にとって魅力的な言語活動を設定する。
③一貫性のある単元計画を工夫する。

【仮説2】期待される生徒のふりかえりへ導く学習活動の工夫をすれば、生徒が自ら学習の調整を図りながら学び、学びが次の学習や生活につながるであろう。

【手立て】①期待される生徒の姿から逆算して、学習計画を立てる。
②身につけたい資質・能力を発揮する言語活動を工夫する。
③生徒が学習を自覚・整理する機会を設ける。

3 授業実践 1

(1) 単元名・教材名

わたしの理想の変化について話し合おう～場面と描写を結び付けて読む～
「星の花が降るころに」（光村図書 1年）

(2) 仮説1に対する手立ての実践

ア 本単元で、どのような言語能力を身につけさせるか明確にする。

○生徒の実態（国語の授業から）

小グループで意見交換をすることを好む生徒が多い一方、自分の考えを話すことには苦手意識を持っている。「心情の読み取り」に対して苦手意識をもつ生徒が非常に多く、描写や場面と心情を結びつけて読むことに課題がある。

○本単元のねらい（身につけさせたい資質・能力）

○ 読むこと（1）

イ 場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉えること。
ウ 目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写を結び付けたりして、内容を解釈すること。



○身につけさせたい言語能力

場面と場面を結び付けて、心情の変化を読み取る力

イ 生徒にとって魅力的な言語活動を設定する。

○生徒の実態（特性や発達段階から）

- ・他者と話し合うことには意欲的な生徒が多く、友達と課題を解決しようという姿勢が見られる。
- ・自分の意見や考えを他者に伝えることに抵抗を感じ、活動に消極的になることがある。
- ・夏休みに三者面談を経験し、これまでのことから今後について話し合う場だと理解している。
- ・授業を通して、苦手を克服したいと考えている生徒は多くいる。

○言語活動例

読むこと

イ 小説や随筆などを読み、考えたことなどを記録したり伝え合ったりする活動。

○設定した言語活動

二者面談を通して、「わたし」の理想の変化について話し合おう。

生徒が活動のイメージをしやすいように、夏休みに経験したばかりの二者面談を設定した。二者面談という活動の性質を生かして、身につけさせたい「登場人物の心情の変化について考える力」や生徒が課題としている「自分の考えを伝える力」を育成する。

ウ 一貫性のある単元計画を工夫する。

○以前の単元計画

1	2、3	4	5
本文を通読し、印象に残った部分をまとめる。	場面の展開を確認し、各場面での登場人物の心情を捉える。	物語の前半と後半の内容を比べ、わたしの心情の変化を捉える。	登場人物の心情を想像して作品がどう続いていくかを考える。

場面ごとの心情把握

物語の続編創作

第1時から第4時までの学習活動と第5時の学習活動の関連性が希薄で、単元を通しての活動がぶつ切りになってしまっていた。さらに、作品の続編を書く活動に第4時までの読み取りが生かされないことが多くあった。

○今回の単元計画

1	2	3	4	5
「文章中の表現を基に二者面談資料を作る活動について」の見通しを立てる。	わたしの性格を読み取る。 (言動や情景描写から人物的心情を捉える)	文章中のわたしの変化を読み取る。 (場面の移り変わりを意識しながら変化を捉える)	わたしの変化の理由、きっかけを読み取る。 (間接的な描写に着目する)	二者面談を通して、今後のわたしの理想的な変化について考える。

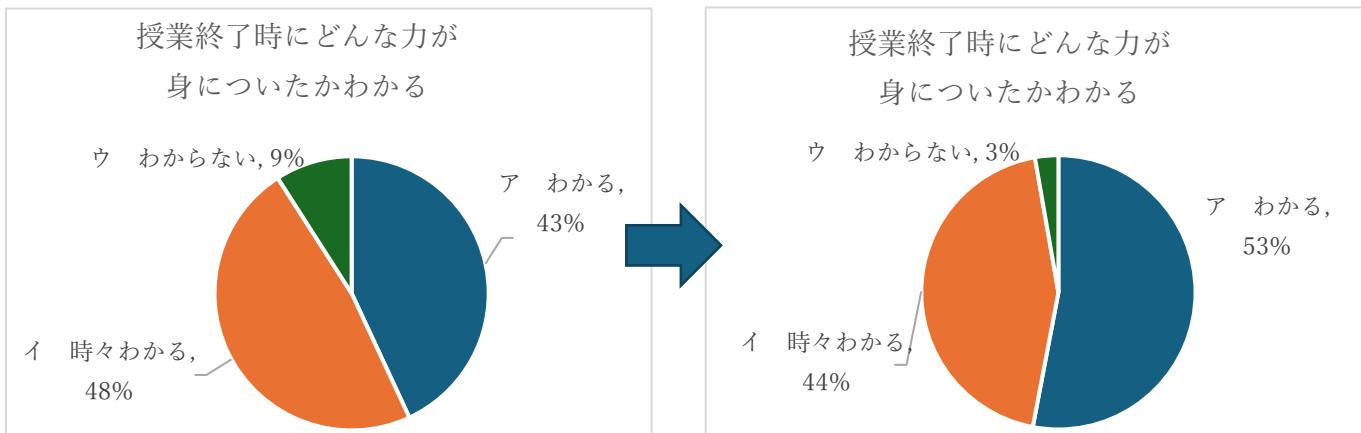
二者面談の資料づくりを通して、今後の「わたし」について考えよう

第1時から「二者面談でわたしの理想の変化について話し合う」という言語活動に向けて、読み取りをしていくことができ、単元を通して一貫した学習活動を展開することができるを考えた。生徒の課題意識も明確になり、思考がぶれてしまう生徒が減少するよう工夫した。

(3) 実践1の成果と課題

ア 成果

- 授業終了時に「何について学んだのかがわかる」と答えている児童・生徒が増えていることがわかる。学習活動を通して、身につけるべき力に気づくことができていると言えるだろう。（実践前後のアンケート比較）



- 多くの生徒が場面と描写を結びつけて「わたし」の変化を読み取ることができた。「わたし」の変化のきっかけに着目して、今後のわたしについて考えている様子も見取ることができた。（生徒のワークシートより）
- 入学当初の授業では表面的な記述だったのに対し、本実践授業では、ポイントを押さえ、学習に取り組んでいる様子が見られた。（生徒のふりかえりより）

イ 課題

- 第2～4時は課題解決型の学習で展開したため、読み取りの内容に大きく差異が生じてしまった。全体でのまとめを適宜取り入れる必要性を再認識した。
- 身につけた力を活用したり、大切だと感じたりする割合はまだまだ高いとは言えない。そのため、日常生活・社会生活や学習場面と関連づけた指導を充実させが必要である。

(4) 実践1のまとめ

生徒はそれぞれの学習活動が主たる言語活動に必要な要素だと実感しながら学んでいた。そのため、何をすべきか、どんな力が身についたか実感できた生徒が増加したと考えられる。また、グループでの話し合い活動を通して学習を展開していたため、自分にはない視点や考えを得られ、そこから学びが広がったり、深まったりする生徒の姿が多くみられた。教師が考える身につけさせたい力（指導事項）と生徒が感じる身についた力（学びの自覚）の差異を修正することはできた。しかし、そこから生徒の日常生活につなげるには至らなかった。単に生徒の生活に即した言語活動を設定するだけでは、他の場面に転移するには至らない。より汎用性のある力として生徒が学びを自覚する必要性を感じた。

4 授業実践 2

(1) 単元名・教材名

私の主張レポートで自分の考えを伝えよう～主張と根拠を結びつけて書く～

「『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」(光村図書 1年)

「根拠を示して説明しよう」(光村図書 1年)

(2) 仮説 2に対する手立ての実践

ア 期待される生徒の姿から逆算して、学習計画を立てる。

○本単元における期待される生徒の姿

身につけさせたい資質・能力だけでなく、授業後のふりかえりや活動の中でどのような姿が見られれば良いかという視点でも期待される生徒の姿について検討した。

(身につけたい資質・能力)

B 書くこと (1)

ウ 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わるよう文章になるように工夫すること。

(期待する生徒の姿)

- ・主張は根拠に支えられることで説得力が増すことを理解している。
- ・根拠を明確にして書いたことで自身の文章の説得力が増したことを実感している。
- ・これまで自分が書いた文章を「根拠を明確に示していたか」という観点で振り返ってる。
- ・今後、自分の考えを表現する際に根拠を明確にすることを意識しようとしている。

* 「書く」活動に限らず

○生徒の姿から逆算する授業計画

期待される生徒の姿に導くためには、どのような学習活動や思考の流れが必要かを考え、そこから学習計画を逆算していく。

学習活動のゴール

主張を支える根拠を明確にして、自分の考えが書ける生徒の育成



ゴールに導くための流れの逆算

- ・主張と根拠の結びつきを意識して、文章を書く
- ・(書けるように) 文章を読み、主張と根拠の結びつきを整理する
- ・(整理できるように) 根拠を明確にして伝えている事例となる文章を読む



学習計画の立案

① 「『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」を読む。

② 主張と根拠の結びつきの大切さについて学ぶ。

③ 主張を支える根拠を明確にしながら、自分の考えを書く。

○実際の学習計画

時	主な学習活動	学習内容	指導上の留意点・評価
1	○学習の方向性（単元目標等）を確認する。 ○研究のきっかけと筆者の仮説を捉える。 ○本文を5つのまとまりに分け、役割を確認する。	○段落の役割 ○文章の構成	○このような構成にした筆者の意図も考えさせる。
2	○検証の段落の論展開を図式化する。 ○図式化した内容をもとに筆者がこのような構成にした意図を考える。	○チャート ○論の展開と効果	○説得力を高めるという視点で筆者の工夫を考えさせる。
3	○文末表現に注目して文章を比べる。 ○比較して感じた印象をもとに筆者の意図について話し合う。	○表現の工夫 ○事実と意見	○文末表現を変えた3種類の文章を提示 ①意見ベース ②事実ベース ③本文 ○事実と意見のつながりに気づかせる。
4	○説得力のある文章を書くために何が大切か話し合う ○「私の主張レポート」にどのように活かせるか考える。		○前時までの学習のふりかえり 2時間目：論展開、根拠となる事実 3時間目：事実と意見の組み合わせ
5	○原因と結果の関係を読み取る ○原因と結果のつながりに無理はないか確認する	○原因と結果の関係の特徴 ○因果関係等の分析	○導入の工夫 ・関係なさそうだが、実は関連している事例やその反対の事例を紹介
6	○「私の主張レポート」の題材決定 ○レポートの骨組 ○必要なデータ収集	○情報の種類 ○アンケートの検討・作成 ○図表の検討・作成	○決定できない生徒のために選択肢も用意 ○工夫したポイントを記入させる
7	○レポート作成(word) ○情報の引用の仕方を確認する	○引用のしかた ○出典の示し方 ○調査 ○調査結果の分析 ○考察	○「レポートの例」を型として活用する
8	○レポートを読み、評価し合い、学習を振り返る。	○相互評価 ○学習の振り返り	○グループ内でレポートを読み合い、評価のポイントに沿って相互評価する。

イ 身につけたい資質・能力を発揮する言語活動を工夫する。

○期待される生徒の姿に導くための言語活動

「生活の中で訴えたいこと」をレポートにして伝えよう。

生徒自身が伝えたいことは日常生活の中に多くあると考え、「生活の中で訴えたい」ことを題材にした。「伝えたい」「共感してほしい」「わかってほしい」という思いが強ければ強

いほど、学習に対して前向きに取り組むことができると考えた。また、自分の考えを整理したり、学んだことが活用されているか確認しやすいため、「レポートを書く」という活動を設定した。

ウ 生徒が学習を自覚・整理する機会を設ける。

○生徒の記述を活用した導入やまとめ

授業のポイントや活動の価値付けを行う際に、生徒のワークシートやふりかえりの記述を提示した。同じ教室で学ぶ仲間の事例が提示されることで、自身の学習と照らし合わせながら学びを整理できると考えた。また、全体の場で取り上げられることが生徒の学習意欲につながる効果も期待した。

○二段階行うふりかえり

学習の振り返りを記述する前に対話によって振り返る活動を取り入れた。具体的には、本時の学習活動、困っていること、次回の計画等を生徒同士で話す時間である。オンラインメタ認知における先行研究の知見から学習や疑問を想起し、説明するアウトプット活動の有効性が示されていたため、話することで自分が理解できていない点やうまく言語化できていない部分を明らかにしふりかえることを求めた。さらに、対話によって疑問や困り感が解決する効果を一部ねらった。

(3) 成果と課題

ア 成果

- ・「こんなことを訴えたい！」と活動に意欲的に取り組む生徒が多くいた。設定した言語活動が生徒にとっては、効果的であったことがわかった。
- ・生徒自身が試行錯誤を繰り返すことで自分の学びとして実感することができている様子が見られた。生徒の振り返りを読むと、文末表現に顕著に表れていた。これまででは「学んだ」「わかった」「～らしい」と書いていた生徒が、「気づいた」「感じた」「～だと思う」と記述していた。

(生徒の振り返り記述 *一部抜粋)

- ・主張したいことがある場合、みんなに納得してもらえる根拠を示さなければならぬと気づいた。
- ・自分は普段、意見ばかりで根拠となる事実が欠けているからみんなに納得してもらえないのだと感じることができた。

- ・生徒の記述を活用したことでの導入やまとめの時間には生徒の集中が増していた。記述が活用された生徒は、次の学習時間にも意欲的に取り組む姿勢が見られた。

イ 課題

- ・試行錯誤の場面をグループでの活動にしていたため、受け身の姿勢で学習に臨む生徒も一部いた。「自身の学び」として受け止められなかった様子も見られた。
- ・生活の中に訴えたいことがないという生徒は、レポートを書くことに意欲的にはなれないようだった。題材が定まらない生徒への手立てを再検討する必要がある。

(4) 実践2のまとめ

生徒自身が日常生活での経験や思いをもとにして進んだ活動だったため、日常生活とのつながりを意識しやすい様子であった。「こうすれば人に理解してもらえる」、「今までの自分の主張はここが欠けていた」という発言や記述も見られ、学びと日常がつながった姿であった。一方で、「自分の主張を書く」という場面に限定した学びであった点も否めない。「何かを 主張する」となれば今回の学びが活かされるが、他の文脈の中でも生きる汎用性のある知識や思考力としては根付いていないのではないだろうか。様々な目的、状況や場面でも生かされうる、より本質的な力を身につける必要があると考える。

5 研究のまとめと今後の展望

生徒が学びを実生活に生かそうと意欲的に学習する国語科の授業を理想とし、授業を構想・実践してきた。2つの仮説を立てて取り組んだ結果、一定の成果を得ることができた。特に言語活動の設定が生徒の学習意欲に与える影響は大きいと感じた。生徒自身の課題意識や身近な経験と合致した言語活動を設定することで、学習に対して前向きになる生徒が多く見られた。そして、学習計画と言語活動を関連づけることも効果的であった。どこに向かって活動しているのかが明確になることで、生徒は常にゴールを見失わずに活動することができていた。身につけさせたい資質・能力から逸れずに生徒を育成する上で、言語活動と学習計画の一体化が重要であることを再認識した。また、言語活動と学習計画の一体化を進める上で、単元終了時の生徒の姿から逆算する授業計画は非常に効果的であった。学習計画が生徒の姿からスタートするという点で、ウィギンズらの「逆向き設計」とも通ずる部分があり、一貫性のある計画を作ることができる工夫と言えるだろう。

一方で、教師が提示する言語活動の限界を感じている。題材やまとめ方を限定することで、自身の思いや考えとは離れてしまう生徒もいた。文部科学省は、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学びを最適なものへと調整する「学習の個性化」の必要性を説いている。一人一人が意欲的に取り組める学習活動にするための工夫について研究を深めたい。また、生徒にとっては「二者面談をする」「レポートを書く」という活動に重点が置かれ、「場面と描写を結びつけて読める」、「根拠を明確にして書ける」という資質・能力に焦点化されていないように感じた。実生活や社会において、いつでも、どのような課題に対しても発揮できる状態が、「生きてはたらく国語力」だと考える。中央教育審議会では、身につけるべき知識について「基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容（特に主要な概念に関するもの）の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくこと」と示している。そのためには、生徒たちがより汎用性の高い資質・能力を身につけることが必要となる。今後は、「生徒が学びを自覚・整理できる学習活動の工夫」や「中核的な概念理解を促す授業構想」について研究を進め、実生活・実社会で生きてはたらく国語力の育成につなげていきたい。